

## 金子みすゞ詩作品から見えてきた日本、人間らしさ

Nahed Almerce (ナーヘド アルメリ)

私は日本に留学してから、日本人がみな様々な花、虫、魚の名前を色々覚えていることに驚いた。日本人の友達との会話で、向こうではどういう食べ物が食べられているか、どんな天気なのかと聞かれて、シリアのことだから喜んで一生懸命説明していた。だが、困ったのは、どんな魚が食べられているか、季節とともにどんな花が咲くかという質問に対して、「魚は魚で、花は花でしょう」と、質問自体を不思議に思いながら答えるしかなかったことだ。

私の国、シリアは地中海に面しているが、海の生物の種類が豊富でないため、ほとんどの魚は単に“魚”と呼ばれている。魚ほどではないが、花と虫の名前もそれほど重要ではない。それぞれに名前はあるのだが、日常生活の話の中でも使われないし、学校の教科書にもあまり出てこないし、日本詩（俳句・短歌・童謡詩）のようにそれらの名前は歌われていない。来日したばかりの頃は、花にも虫にも魚にもそれぞれに名前があり、本当に覚える必要があるのかと面倒くさく思っていた。

私はシリアのダマスカス大学の日本語日本文学科で 4 年間にわたり日本語を学んできた。また、大学 2 年生の時一ヵ月半日本に短期留学した経験をへて、更に日本の文化、日本人の習慣、考え方について、理解と興味を深めることができた。ところで、もともとアラブ詩に深い興味を抱き、長年にわたって様々な作品を読んできたが、特に詩における特有な言葉づかいや限定された言葉による深い意味の伝達、詩的な言葉で読者を楽しませる様々な技法などに興味をはらってきた。そこで、2011 年 9 月に研究生として筑波大学に留学してからは、自国と遠く隔った日本にはどのような詩作品があるのか興味を持ち読み始めた。その中で特に注目したのは金子みすゞの詩である。

しかし、みすゞの作品を読んでいても花、虫、魚の名前がよく出てくる。日本人の友達にたずねると、この名前の花が出ているから今はこの季節だよとか、この名前の魚はこういうサイズでこういう味、こういう季節に食べるんだよとか教えてくれた。どうして一つの名前からそこまで分かるのかと、うらやましく思うようになった私は、こういうのどこでどうして覚えるのか、と思い調べると、学校でも少し教えているようだが、日本人のほとんどはそれらを教わっていると意識しているわけではない。一つ一つの名前は、教わるま

でもなく日常生活の一部となっている。そこまで分かるのに主な助けになったのは金子みすゞの詩作品だった。

金子みすゞという女性は明治 36 年 (1903)、山口県に生まれて、20 歳のころから詩をつくり、「童謡詩人」として活躍し、当時の童謡詩人達のあこがれの存在だったようである。しかし、512 編の詩を遺して 26 歳の若さでこの世を去った。

金子みすゞ全集『金子みすゞ童謡全集』(全 6 巻、JULA 出版局 2004) を読んで、作品に対する理解を深めることができたころ、彼女についての日本人の意見、評価を知りたいと思い、日本人の友達に聞いてみたり、インターネットで調べたりもした。そこで、金子みすゞという名前がとても有名であることに驚いた。2011 年の東日本大震災直後テレビの CM の自粛が行われている中で、みすゞの「こだまでしょうか」が AC (公共広告機構) の CM として繰り返し放送され、その結果、みすゞブームが再燃して現在に至っているのだと分かった。彼女は一般的に人間的な優しさで有名だ。みすゞは身近な自然を詠い、そのなかでも小さな花や鳥、魚などのような人間からすると小さくて弱いとみなされているものを取り上げ、それらに対して優しい視点を向けて詠っている。しかし、私は、みすゞが書いている子供にも分かるような簡単な優しい言葉の裏には、深い意味が読み取れるように思えた。そして、みすゞの詩は文学作品として、日本人の生活様式その他、日本文化、日本人の心そのものと深くかかわるのだと思う。私はみすゞ作品を読んだことをきっかけにして、花、虫、日本の昔話、子供の遊び、日本の行事などを知ることができた。

花、虫、鳥、木などが季語として和歌の世界でよく詠われているのを授業でも学んだ。また、季節の変わり目に見かける花、虫、食べる魚などの“旬”を体験して、更に日本人のそれらの生物に対する意識を実感するようになった。和歌、詩、日本人の心がだんだんと分かってきて、前より少し近づくことも出来たように感じた。それだけでなく、人間以外の世界にも視点が広がり、人間の存在を中心にした世界の在り方と眼差しを、みすゞの作品に続き、和歌を読んだことをきっかけに考え改めることができた。みすゞが「花の名まえ」で詠っているように、

御本のなかにゃ、たくさんの、/花の名まえがあるけれど、/私はその花知らないの。  
//町でみるのは、人、くるま、/海には舟と波ばかり、/いつも港はさみしいの。// (中略) 母さんにきいても、母さんも、/町にいるから、知らないの。/いつも私はさみしいの。//寝かせばねむる、人形も、/御本も、まりも、みなすてて、/いま、いま、私は、行きたいの。//ひろい田舎の野を駆けて、/いろんな花の名を知って、みんなお友だちになれるなら。

(金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集②美しい町・下』JULA 出版局、2003年、156 - 158頁)

この分かり易く平易な童謡詩から、様々な意味を汲み取ることができる。日本のことわざ「井に坐して天を見る」を覚える。

また、日本の昔話と子供の遊び、日本の行事に関して、みすゞはそれらをそのまま説明するのではなく、それらを作品であげながら子供の心を描いたり、事柄に対して改めて考えさせたりしている。例をあげると、「こぶとり」という作品に、みすゞは次のように書いている。

正直爺さんこぶがなく、/なんだか寂しなりました。/意地悪爺さんこぶがふえ、/毎日わいわい泣いてます。//正直爺さんお見舞だ、/わたしのこぶがついたとは、/やれやれ、ほんとお気の毒、/も一度、一しよにまいりましょ。//山から出て来た二人づれ、/正直爺さんこぶ一つ、/意地悪爺さんこぶ一つ、/二人でにこにこ笑ってた。

(金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集①美しい町・上』JULA 出版局、2003年、8 - 29頁)

利他心と利己心の問題を、みすゞは心理すなわち心持の問題として「こぶとり」の続きを描いている。昔話の中では、正直爺さんのような善良な人がハッピーエンドを迎えることは当たり前のことだ。しかし得た幸福を独占するだけでは、自分の善良さがなくなるのではないかと思う。いつも、邪人や意地悪な爺さんは身を滅ぼし、優しい人や正直な爺さんが幸福を自分のものにすることになっているが、みすゞは昔話のありふれた人生についての考え方、観念の立場から抜け出して、自分の幸福を求める心持の問題を読者に考えさせて詠っているのだ。

言うまでもなく、詩は贅肉的な叙述を極度に排した文学である。また、作者の目に映ったこと、心に深く思ったこと、鋭く考えてきたことを言語として実現させる。そのような方法でみすゞは私たちに訴え掛けてくるのである。例えば「雀のかあさん」では、

子どもが /小雀 /つかまえた。//その子の /かあさん /わらってた。//雀のかあさん /それみてた。//お屋根で /鳴かずに /それ見てた。

(金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集①美しい町・上』JULA 出版局、2003年、44 - 45頁)

「その子のかあさん」と「雀のかあさん」が対比され、一つの出来事における二人の「かあさん」の反応が比較されている。そして、語り手、みすゞは、どちらの立場にも属することなく、第三者の視点からこれを見ている。「その子のかあさん」には、小雀を捕まえた元気そうなわが子に対しての喜びがあり、そのことは「笑って」と表現されることで伝わ

ってくる。それに対して「雀のかあさん」は、わが子が捕まえられてしまった失意の中にあるはずだが、その行為者に立ち向かうことの出来ない立場に置かれている。「雀のかあさん」は、わが子を救うことができず、「鳴かずに」ただ見ているだけなのである。ここでの「鳴かずに」という描写は「雀のかあさん」の“悲しみ”を感じさせるだろう。そして、第三連と第四連で「雀のかあさん」が、わが子が捕えられている様子を見ているという表現の繰り返しによって、語り手の心情的な立場が伝わってくるだろう。しかし、感情を表わす言葉を直接使わず、ただその光景を外側から見て伝えている。みすゞは、ここに、人間の傲慢さを厳しく指摘している。読者が雀の母親の悲しさに共感するやさしい気持ちへと誘われているように読み取れるが、それより重要なのは、この詩が哀感を読者に伝えるということではなく、「雀のかあさん」の感情は表情としては見えないということを強調し読者にまざまざと感じさせることではないだろうか。人間は動物と比べて表情があり、言葉を発することができる。みすゞは「雀のかあさん」の描写を通じて、表情で見えない感情と言語で語れない沈黙の声を強調している。こうした目で見えない感情、耳では聞こえない沈黙の声のような、表に表れないものをつかみ取る知見が人間に求められているのである。概していえば、急速に工業化した現代社会の混沌とした生活、自然や文化との接触なしに、人間である自分たちを自覚せず習得してきた生命的な感覚に接触して、ものを精神的に把握する人間らしさを掘り起こすことが大事だろう。我々が巻き込まれているもの、文化、環境を見るのであり、そのものによって我々の思考と知識が限定されているのだと分かった。外国へ出て、違う文化の人と接することによって新しいことがだんだん見えてきて、新しい視点、考え方が生じるだろう。

日本へ来た私は、金子みすゞの作品を読んだことで、日本の季節感と自然観、人間以外の存在に近づけただけではなく、それによって自分の中にある“人間”にも近づくことが出来たように感じる。何が生であり、何が死であり、人間というのは何であるのか、深いところから問い直すことができた。見直す働きの中に自己革新力も生じた。そこで、なぜ日本人がはっきりものを言わないのか、季節を表す生物に対する思いは何なのか、日本人のみなの名前にまでも含まれている自然に対する意識が高まってきた。

最初は写生的な描写ばかりにし見えなかったみすゞ作品も、和歌も、後になって分かってきたのはとてもよかったのだと思う。なぜ日本詩に興味があるのかと不思議に思われることがあるが、それは心に訴え掛けたり人を動かしたり感動させたりするような言語の力があるからだと答えることができる。